岷江入楚

末摘花

6

Washington, D. C.

末摘花

私　源氏君十七歳の春よりの事あり

おもへとも猶あかさりし夕貞の露にをくれし心ちを年月ふれと猶の

初ハ夕貞の夫をうけてなを花為様也末摘花是也

大輔命婦語常陸姫君有様事

朧月夜之比立寄常陸姫君琴聞事

頭中将立隠透垣本見顕事

同時源氏与頭中将同車而大殿御所参会物音事

源氏与頭中将送常陸文琴音聞事

源氏童病事　若紫巻　此時と同時のこと也　様の並こそはみえしかう

八月廿日始見ル常陸姫君顔事

朱雀院行幸兼人々人々出定事

源氏遣消息於常陸文事

於大殿御所習舞事　并末子

冬比宿常陸文見事　是より後ハ紅葉賀巻　以後のこと　私又相聖並

女房着紹装事

使随身拂橘樹事

歳暮右侍従姫君送佛装束於源氏許ケリ
源氏返歌事
頼求子頼難ケリ
十八歳
正月七日高名侍文ケリ
翌日還二條院若君戯ケリ
宰平仲物語ケリ

末摘花　以為并詞為巻名

なつかしき色ともなしに何にこの末摘花を袖にふれけん
詞ニハ於りふし末つむ花ひやうふさしらずありき
此句ニハ巻名とりけり

此巻ハ若紫の横竪の並也 源氏君十七歳の春より十八歳の
春まて迄の事にて末摘花と云ふより外に巻の名とせり
花の色つむ花ハ末より隠しよりて末摘花といふ常陸宮の
姫君の鼻の何くさふよりて名とくらへる也 秋同
源十七歳の二月より花宴の前より此事
並横竪の並也 巻名以頼詞源氏十七歳の春より翌年
十八歳の春まて花宴の事をいふ並ふるふよりて
花の侍の事も末摘花ハ末より咲下何も侍る君咲きて
くれて末より咲ず不見も有り末つむ花といふて
アララキ
蘗蘆の色に咲の侍る紅葉にハあらん
クハク
日本の紀に巻よりは以前の事を云ひ後の事をいふ

は此巻ハ帚木の巻の横並也 仍夕顔
巻ニ付きて此歌あるを源氏十七歳の夏より
おもひつゝ小ハ花のなしとみえけり
出り人ニも折られさりし

夕顔の巻の詞ニ 夕顔のしろくとけりて花の巻ハ
三月ニ少将へまかりて やすらひなくおもひのまゝに
かけり此巻はいま一つさたかならすよ夕顔の
巻ニはつかしく 思ひたなる

作者集
弄
此羽んうつし ひとしく とんぬるとせ
此巻を誰ともしらす 露にやとれる秋をそとて
此夕顔の巻の山寺の鐘の音 初の鐘ハ
彼是の詞ニもしらしとは 細く聞えし ちとあるを
此物のはしめの上にたつ光源氏の 御物語ニあはれ
初したる人々をこの君の字ニ 入れる八宮の人々をと云物
まよひのはし 古今折り人にも多くと見えて八の宮ニおもむく
下もしとかきて ふしかのあはし 此巻つはきにて年にもあ
物も夕顔の事 さつく後又さの事なれは人の心やすくあひかたらひて

愛 愛嬌なく月は経色不々寛之おかしは八々人のつきたまひは
中比代には也とかへに味まし平家ハ今重上の不審紙余の然欲
源氏一世不忘哉仍は名乗になれ何ちらん求と源氏にしのはす
出来し給優数好色の筆帖ハ源氏に生の性能可貴工夫也
れ出来の紙おもしろしくし源切の心ときつる紀し古今易とし
まけ給ふの心ひなし仍る書面の文つゝまに新歌なる翔し以斤義
前帰不違し云云て知て　武哉只がましきしハ之へとてし論語に
既修不答とゆるす本文あつき花とんなりらてさは物人たそ
いさと云んし出文の心ハ色まししきうの代ハ花ハしと云筆丸
夕かの露まとられ　末つむのすかたにみえくる光のいら
と夕ゑまかまして後又きなかられんとやうつと　のへし 抄月
ちとかつこともなりけぬさまれ　弄 葵上六条宮宗なる御ゆし 抄月
或抄は葵上ハあまりらんそなくさらけはいすゝ御息所とて 箋月
さりけんつれしいる人ものまし くすまし

くしきだこと　も人ゆる君なる忠し
んうつきかゝのはいてもましさる　河 桃
花 司る桐如琴んとのく卓文君か桃といへり桃ハ女花の乳気とを
はんかむしつれはるしさハいきかかしれつとんらく人なと
やられんし我をいうむしなきとらふんのよけつり
如 桃戦なとのつし　ちつきのかんし　字なあつまつかんし
箋曰 桃字し　広白に桃ハ擬を顕す擬ハ顕し実メ色ハ事徳
史書の百めけと論お意せなまし　箋紫百
まちくろつしかりし　花 夕顔上のすしあやはらかなる女し
かりしなし 抄月　弄 桃戦の字花なりしこなんさけ戦と
桃と云ハ手う目に続まて一合戦ては二の兼日御来し筆し書ん
はすけ段まれ両名失ぬ代おめか取らん所かつ桃と云とこゝの名あし
私 葵上 六条御息所なていつしもまれをとらしと争ゐ相んつる
まとりつる丸 物進き 咲なくし
いえてとくしきにまかえハ　箋 笑ひ倍めるといひまして　あまへたし

ゐまします事ありけん　　箋 蓼卿息女の物よみあそばれ人と云

見つきてうしなひ　　箋曰見つけてうしなはて云る雨夜の物語なし

うりを回におかしきれい　　は　川ならうするにみもなさ名し

箋曰夕貝巻に此納言の御合く服だに失ほしい

とおかしき事の給ひおさん為し

箋曰夕貝上ハ源のんよしくおひきれハ今更しなくて

きるりに此ひまへりにろうを回みてとかく大虫撮よらひ

妓ハくら伊らしめ鼻なるのおうくつもしてみこうもの世は

ゆへつきて

きそりやと打かし　　箋曰ましあるし　まらゆへつきなうに付すと此等をか

妓くにさかまられ打してうつきに打しよろかろのおくろいらへ

うえ一かて見付ゆよりておれとしられすや源へハうひきものうし

いとめうれしうや　　如菓子物し　　箋曰一段無論し

箋曰女房のうちにハ源はつれなきこへのすきハ河まう曲もといひ格なし

箋曰うれてくなひきやうれまい又女の性に移され氏か

あるすべ次の段かくおもひし

院ましあらんつきれハ　　箋曰女の好色ありすと云あり口つよく

おもはるく源に原りけさね今は又あるれをたねハ源て

なきく人のとき物をうふ　源の一段ありての段てに又世をけ

ての段すすきハ又てかくへうつろハ所もあるしと面しれん

れうへをなし　　如云付箋あり

きそしもりし　うそれ　　箋曰まめやうに実源さての事て

とけさう付らふ

あらうなく　　箋曰これハ源の志かくの段うしてまつそいへて

さもあらきわまりよあらくくさせるすなうは男よあらし

だらあるすけなく源し此段ぶ三段し又はひろよ見録あそのるを

のみこしおして寝よ三段そうそてくか　　箋曰此段の心をき

かうんつれハと見えし源へんつれハ人の庭よハ実なし

うへよ実付くてうるしたとしんなうハこくへんうくましへハ

やさやすこしあまうるのあそてたれ時園よ好色のくらひまする

さて源ていひさし好しさる所の事くろ実の事てとをれ

ものひろけあるとし斯あすし　られたくさらしもらし　そへとも

云し

例退居してあまくよむさしくる男あまりし気も庭の源へ
流生のかんとの皆よく八なきしさくなりしきりきよさ
御りめれた沖の渚くらいさし故くるてわりとし
私案の承日あをいても　源を　むとのつひなりんて
なれしきるよ　案　左丞心腹のうし
されけとくと
枕　定経下云の疑の事し
ちてかとハ患皆ふかを施しさうけとまらはつめてさゆくれは御くし
萩の葉わと　案　将くの荻の葉の
わけのこくれそうし　枕　あるの萩基うしとはめてなさるもなき
大弐を荻の使よふくへうもり
大さこ右のなり北わのるとまと所あえし　源ハさらうる佃
枕　源の性を中も家まつて八よまよ俵し
案　日以上に院あ後の御かれ批判しかけ源氏の性今後をまるて御まを
徳論ちうん何ハ似合女之性ん縫くあまゆまうつらふハ力、あまり氏胡蝶ん
かめまつ所の宗とハ捨所りん源氏の性也　況や臣上のうハ母まゑん

なくつまさらん所し小狂かみって本をさう記借まもちて今れなる
くろかけの人今て何ぐ点の名所を忌所をさうあとひさる〈手院紙に
左衛門のめのとゝて　案　京国のかれん
心　源のめのとし左衛門のめのとうハつまうくハけ左衛門のしく代大切ふかし
大輔の命婦　案　源の源めのてうし
内にさふらふ　大輔命婦　内案まなすまし
わかむとほりの兵部大輔　枕　王孫件らして
案　河云王家無男論　経ニ世雄無男論　うつかあてしくあの内乳母子
一人ハまうんと御りて人ハ太気けかとく一流秘無男論　又和漢也之見え
私漢に在たらうれこと　以上河の事し
君ちめし　つうひ　源し
母ハ筑前守の妻にて　案　日大輔命婦の母左衛門乳母也　彼ハ王源の子孫
大輔ハ妻かくて大輔命婦を生て後又ハ筑前守ハ妻まてあれるて
下りにけれは　彼ハ実父又あの妻何る気和婦の継母也　筑前ハ継父
筑前守　左衛門乳母の後夫家ア大輔妻　大輔命婦の継母
ち君のもとを里にてゆく　案　日母ハ新まつ大なるとひく筑前の由

ふくきこそ後毎にもちひしをされども実父の方よりもよし
みかどちのみをせしまり　箋見しら末摘のさむ語りし
光孝天皇承和五年正月任常陸太守絶代明元長鄭ヒ
兵部大輔ヲ授ヌ人参ス使ニて積りし　抄月
さひきし　源のとひかし
ろあんのあなきかはしにえしまし沙ろん　必大輔命婦の初し
うしへのをくれしかてうかはいひうしもてしらぬやうなる第
まましにもありし常ちよわる事しく年はへきとしへし　弄箋月
うひかるか　抄潜（ひそか）らみし　かくらし事し
箋同河の筆君そ
ましきよむなとし　抄きうへきし
あまりかく　承　箋曰大輔命婦ハ平分の人じんて定まらく
翠（スイキヨ）峯にし使ハかりきし　第末てらべくとくれたるよそをもそ
万端同裕のまくへきぬりつし
抄箋帚末の初　抄弄ハおまよ清箋二ハうふ川面白し
琴ぜそたかつしき　まつしのきんをひきなまし

白氏文集六十二北窓ノ三友

このなうく
旧 今日北窓ノ下自問何ノ所為欣然得タリ三友ヲ三友ハ者為ル誰ソ琴罷
輒挙酒ヲ酒罷輒吟詩ヲ三友遞ニ相引循環無シ已時一弾愜中心ニ一
詠暢四支ニ猶恐中ニ有間以酔彌縫之
抄 楽天ハ北窓の三友ハ　琴　詩　酒也　箋月
もは琴ぜそなりしきかうひ人とし　姫ならと命婦の事
よつまて沙れへくのひとて
いまよくそやうなくありけん
旧 女房かなれ源とされ伊行ハ今ハ源と云り
平 源のすし　私月一物云河海ハ兄ら但馬ハうれ命ますれハ女也て
らいなかりへきはあしくそあるんの一くさハ源とて見
たるまゐ存より
抄 河にハ源のすと云但馬まて一源氏ハ女のすりんもつまあらん
只源なりけ　箋いまよく云ハ源し見まてはへきゝは
源のかりよハ分てもあらしのと日本の女房の詞に
例あかしる内源ちてやうくとつゝまし　大鏡よりも
今おいり院大納言なと源と伝して兼俊集にもつまりとも

らみこの　必有常体之躰也

さやうりきこしめ候つゝり

いかうありきく句しや　必源氏也　必令徳句也　蒙少なりとて早下也

句やうは中くく候しし

少当地なりしやあるそとのよし

見らりしと也へと　令徳の句也

つましくよまりそれ　令徳の門葉より書橋のか人々よろこし

ちの大備ハあるそれ候まる　蒙日此句は親しき人なりし

此抄令徳文学ハ学体あハ東れの人々まて此書かきて

かりまさし　私云蒙の句ハ学ア大備てよ候りれハ大体也

の東れ親雜しもみてやと少也　蒙日学ア大備ら抜の書也

のうひとたるハ　必源の加よくれありまて加りし

向そられあるるハ

これはのおかる月役よての給ひ　常体なる人源氏思ひくたりよれ

おかしかる　必令徳句也

地の給そひ一連　梅の句なりしるて地の給まてとし

仰る地と今ハつまなき夜のさ面くらうのまとし

行あるくしふまるて　源氏なり

うちとけらしてよ　必晴しきまでてるきるよりし

内しの方し令徳かうみかうきなりく人し

きハ源もとうしく候てセト何れ候し

さん夜よりらうよれハ　和まつてしはまれるく令徳の句し

かりしとさるう梅のう　おうのさくおろさあし面白くうかう

夕霧夫しも加りしてさかうし入りこれ月の山端ちうき雅とみ也

此ふまのよのおかしうさま白加んし

或抄ニ梅ハ香れ面白きうりしとなれよし面白し

れよの給いうまますの仰るんと又給へら何く此の方し　注

令句り初　蒙少源よハ地の香もむへきき夜のさ面うなあれ

とハ東橋へハ翠の香風さうく人き来れまししまて　二やうこい

てう此人の見かんせくきう子ろへきあまし　或抄云此哥句ハ初表

裏何う人やうかれと常まよ人のりお南殿の初しそめ也

わかれし何人へして　イ本あかれきうし何人へして

〽末摘花に 何か琴弾それは静なる 弾きあはれなん也
同 琴の音弾きて宿人のあはれさそそゝられて 夜さ涼 き
〽廿一葉にも是を答を 其ニて此方を川
命婦殿さして知人にも有
百度に行かぬ人の手にいつりや 百度に行かぬ人なそおかれし
ま 命婦ふかなきけ云ふる人なまさし一ま 百度に行
よの人すれは年まてかくこそうつしきれてさし
〽命婦を 百度小行かぬ人なれは年ころうつし ますとし
松云此事の御へりめしよくする事琴弾とる よ也けし
いつきて給りんと
〽命婦の心の儀のけしきらくきまんとおもふくとし
その様かれ 儀の心も琴はうつて物の音かうきれとえま
よう物なる御人に更にくなくは物をとえゝん
いとひくるあはれつてとて 是をりこて あはれさる身とそひ
めつらし此方の人市し
さそうり 其人の 松係の心

〽荒き陰えのうへ御物おもひあへし
かしつきもくらうちんまゆりすし りなくうさ身御事し
着物くろくみとも もちはゆうなりのとしらけか女のみ御覧する
むかへて 但是ひとへにかまうへしは此頭如し 夕月
花なるものうつかのとし 出家女のとし 又大きさの御事也
諸物られてし 仍うつかの御結縁て
かやうひよりまうしと 此頭のくまよひやまうせしとし
命婦にもあはみのまて 命婦んあひ考へし てたゝさみひせ
気色くさくし
同すもちや仍と 出家らは君抱てまうれあはしされは浮ゆし
此のまゝとてまうししてかくのまゝあひしらうかし
くあかうる御事ゝ 〽命婦は初し 滝月抄に此様といふ物
の青もしゆるひくすみぬへき 東のさぬかへとひとりし
まうちん事ともゝつるへしりてよてゆる心れとふみ
かしまいりなんとゝ 〽一やうにも句をきうてもんし 夕月
女人の書きんとおもう所をとゝいふくさのと 琴をとひせよく

まつて弟姫のことにし　＊源の朝臣源氏出家しまいらするに入るる
中くなる秘ふくも
神しと弟姫のいふてし
人よくて　弟姫もんつひしはとつらんとくりとなくてふゆへし
いくやいとうもそうなり　＊弟姫の朝し
なすみさもゆるともうはらふ家て人も　源の朝し
＊さやうまた人すての様まハあつもつしきて令姫の戸由て源の朝臣
＊松右付箋けさうちある書
むけみさてもあるすとハ令姫か源の姫君のうへ源氏にかき戸由源
氏君もまさもあるすと人はおもてうちとけ物つ姫へき
いてはさりすなれるの后女はうらうけうさらつへきまハあとは
あかれはさりしきあるうさ姫たれいはさやうのもしき前の也ん
うきことして令姫をこうひますてし
あかれはおりまさて　＊前ひさらのまたものす
みちきりはらくや　＊源の人を説とちひらうのそくいなう氏ある
うへのまへの外かいしまんすと　源へ令姫の戸し源の実はよりまいらる

さして内裏へ行幸や姫君
うへと御帰門し源のおまへ宝にうらふくあさくしきにうは
ともてなやもむ源か実か此けんとよりおそう弟姫なそのへ
よあし二くとつゆおりくあるしまれハうやうれ内思ひあるまれ
神を＊うそてまつてつらうハいうあかん　なし
きうつうりうちまひ　＊源の兄そうつのおし
まこんのいそん由うま　源れ羽し
を　弟姫ハわかのてこなれハうくのもて
＊よしかくしてと思われまくらまし
女のあつき面くうし物かん　男れあり源つきまひをあさりし
きもういきう女れ好色なる歌を申てさへきそてのもすとし
ゆもりいろめいてうつ　＊令姫つき面なり
弟姫つ秋思のへよいのゆとそうしくゆうてうくへ中さねと
さん居のさしよ　弟ひきまりうちのさの御かしくそけさい
をきうやとけ源のてらいあますてしあまりててなきゆくのあれに
国ともふハはまてくてり秋のめて

まいらい　遠拒し
おまへのこりとは　常陸守のあはれなる様し
まよりゑそり　頭中将しるまは深まては為の隠の
こん深の五つかれんとしまして
このタつこ内よりかくとも　此朝よりめきおりまおゆき
ますけはうとようてとりてつまく深と頭中将との二人の様子
以下と事すみれ地に書きうかなり此頭中将のうへ為わうきまう
は此いそれならうとことく方きあうはせう朝にみゑうり
あやしきてうるかうきぬもとうし　頭中将の様し
を上る内よりあろうもよもりてたまうてたりえし小わあね
まうらこおかうつるしられは内より退ちのはいうてまうて紫宸を
あうさめん書らこうのへきまあうれ但に禁中にて弥陀の時節
衣をきうう例ておうこや
毎日第に数ある翻の時よりきねと其後例とひあうりを深ふ
あうさうけし衣裳をあうとあらうこうり此奥し　朝を勤
あうらうひかき着平

毎夕頭中将は深ようこうあうとし路ゆうそて将衣ふきうく添
車れ人かうてるふけりんさして又此奥の朝に出衣まして人あうは
二人あうてとにて深て此時は将衣かるへし
かひうしろ　こう将くろうて待し並人によれまんあし
ゑうしつと所いれて　深の袖につまりて頭中将のまうつるを
ゑうしつとおいうしかう
とうらに入すひめまいは　深の寝座へうしてかいひへまゐうはあく
て気時の岩台にくれの早人おけしうひいん頭をゑうてれは一君
内に束縛の理を深ひさゆへいへうれはまうつゐて寝座のそいか
のりうふいまくさゑもりとも右るうし　向下に御し
まとまうつなりうきうり
是かゑれしも　深いいまに頭中将もえん〳〵ねし
うつちとくう由へ所　頭中将の翻し
頭中将
りうまうえ大内山にいうくつまておうくと　みえんねけさよいの月
毎日深て頭中将てあひおうひくて大内山を心ろ御に深の為に
そうらえとあうれ仍御おうもうしし大内山い大内やとと名のうにあれ

箋 むかし大内山ハ 仁和寺の北なれはいふにハ内裏の事に用ゐ来
候ハ内裏をおもひよせてよめり 源頼政ハ大内守護の武士にて
候故よめり 此歌に大内山の山もりハと候へハなる程大内山
の山もりハ木かくれてのミ月を見るかな
名所也大内山のうち宇多院の山陵大内山アリ仁和寺の西也伊勢
此所ヲ 頼政よみ侍らしハの影を見て書風をうつし吹とりきこえて家
ありの山陵使不知此所也 承平元四六月癸未不欲之雑
談に大内山と 以上花 杉本氏の示候也
秘 大内山名所まくらをあけれハしらうそハにハ禁中とさして候也
箋 いさよひの月 むかしやさしき月の名お遠しそ 但上旬にいさ
よひの月なしきまりとあつ十六日の月を云也と
箋 同いさよひハやすらふ事也やすらふ月のいさよひにめくれて
入るをいふなるへし さる心とつなるへし
うしろ狩こもれと 坂中納のやそよいひくうもしろう源の
つまはれなき也
これ君と 秘 中納言見えぬすなし

遅 人のしらぬまくらね 源の坂中将は中々こそこれまふ初し
里よりぬ新院てこれをゆく月のいさよひ山にあれいまこそかくりよ
む 里わかぬ月の光をといふにれしも月のさの入さし山をまそこに
めくりくをうきりかりひとよねるといふにまさるへくてられ
秘 雪のとのし月はいなくてくされをうつましと入さりまそと於
ゆく人のかちさいかしとかりく箋 箋同
箋 入さの山のいさ名所
かくさえひかりうらし
まいさんうらしれ む 坂中将の初し 秘日
箋 佛入ましい法の人をかしてつるにて 箋をた頃男ハ大宋つさぬ男のしらへてつき地
のたいるのよ 時平石まそて 大和物語泉大将 定むたえ
解く夜いきくうけくゆくりまかり物まうおく騒きけ
てしろうよ物しまへうゆきかあんなりきこえて下の格子あけさ
つまよ壬生忠岑けもしまありは階のりうたにおくりしかり
いまはつまうてぬもすそこゆれ類よまうせり橋のもおけらくへと
よくらふうをまけてと何よしそとちんのまうて中にあらまれ

おほいとのゝそれはおほしくらへたるの衣一よおもしろき歌
いつものひとつのかたおもてある忠岑て録(?)かくしける
まうし　昔の例をおもひ人のやうに
かは(?)昔慈(?)鎮のよみし和歌もさやうのかたの書寫(?)　式部卿
泉式部ハ晴年乃おもてに年しもやうに辞(?)かくはたり
それハおもしろきあはれなる事を忠岑は御須(?)にてお
のつきなかりけるにいよいよおもしろき事は武(?)道遠(?)
それめく此ほかにひとつとこと
ありけるいさめ　源氏頭中将のさまをみてるもし又
宮にもてもいひとんとうけしといふことなり
御かたも見つる所　如　源のかたしやうに見つけられ候や
それと夕貞上見ずておハ頭中ねいれかたけりてもうちねをもとめし
よろこひに　薄日記　春の詞よみて
あまくて　やまとうたいかけしも人見るとて
式部卿はなかはよしひかれさるなとと
ひとつ車に　源氏頭中将もとかくいひかはしかりしかはして

同車なり頭中将かゝるなからめさは源の御車なかまへし
おほ葵(?)におほしつめ　源氏かたはらにも頭中将の所にかくまひか
まくてえもなはりて二人なからか葵上の父太政大臣へまうすなるし
今ねらいは　葬門よりなかの所かかりていとも頭中将のかかりけりや
花一勘(?)頭中将なりしと当夜にきりくさいられ頭中将にもかうてはあるし
まへはうちまかせをもその宮のたいしもおかし
とて女房を頭中将ゐあてひて　女房のかへりみるかと女房に侍
らうあはれなるへし
後日　頭中将御て頭中将におちうちて御なをしてかなし
随身をもてなしかしまて　今はさてもかへしきゆるまたる
女房によみたる接(?)ほくてとてのきつらつつのまし
おくさいの　如　葵上の父おほしらし
兵(?)部卿　頭中将　源ひかく右の御使なし
いとをとよ　左大臣葵上をなかなし
内大臣のとは　頭中将ハ葵上のおいすへき事してあきらかに
兵部卿のことまつちかうへし

中務君　　　私　葵上の侍女

或曰源氏の君もしけん人ゆへ大殿にしのひてまうてしみえけるは此君のゆへけるにや　私中務ハ此の君の心のゆへなりけり

まうてしく源氏君をひきてまうて侍る葵上の母大宮の女房にてけれはきしき事もしらねしきこゑ　琵琶ハひきもしけるにや

めてたくあつてひつぬしいたまさかなるハ源氏のことをきてみてまつめ　私源氏も中ゝきこえてまつる所なかりけるまんとおもふもまちすまじかきりをもめし

行つる琴の称　私源氏中将ハ末摘の琴のおとをきゝ給

あつまりしに　或曰此中将のなかしのかきりを

き雨ありかんなとさん　さえのまねしろうれしきまでに

行つるゆやりあひしおもひて此中将のこと

うち君かん　源氏此中将の人よ源氏をやはひしより

頭んとおやくおもひて

そのまいらこころさるかなら　私中宮もこゝにかなしく源氏此中将とし

いつもせてまかへん　源氏をも此中将へもたすかなし

さしやうなるもの雨なきもかんへいハ　こまかりて源氏此中将てまいり

ねなりひきもしぬ末摘のかたもいつまてもおもひて中将ハまい

てらせらはかりもて中ハ中将そはひしきてもおもひ

さてあれ初二人の心そえんしされ給も思ひをとゝ

私　やうよりさかなれハ人のこさもゆつかなりけるてうにいふ

うしろにたちたるくらひ

まいのたとえもてぬるね　私源氏いふみたちゐなりし

かまはぬへうりしたして　私又のてたるもかへし源氏ハ此中将の同道

なうしとハいえゐんめにかのあしくらん

まれかは　源のみんなしていはきれたらひしりやすとおもしく

てたまさかもしさてのもって

いとさうしをミてみいや

あまりかるらうしハさう源のあかなつかしき

とをみんさうくもきハしてのおもてね雨白初し

院籍曰荘老道同異言相知無二下同乙此数れ　或曰王行同二

むかしやまにかけくなるをとりかけての時に中将の人は

しらてあるへきものとて禄なとたまひて
人まさしきものと　弄　源のあそむひのやはらかなるかたちにおはしける人にて
此中将のいとしかやうれ給ハ源へハあまたれあるかしこけれとも
男ハ婦かしを　源そさのいへ子と思ふかなれハかならすなかり
ききつゝまても　さりて思ひしるへも　此中将のうへにつきて
人すまけれのなつかし
てこなたくらひかたれしける　て集おほく、あれしさかりてあつて
きんさわらい源し　源庶ものかへいかんしらちさりねんし
私云見ハ河本乃細しきかく此中将ハ禄んとろまにも
さやうれとしよそおもひへきとし　此説やう
私此中将ハ源より年も中将世界てみもろへきへ人あち
されハやうれなりて　てゝまくゆきてゝうかんそのつとへひ
あひさんと源ハおほえしたうひハ人と思ひ遠し
さうれたみけもの事まけおもひくるうきさんきしまして
れハしきるもれとハおかしく
哉同りもの事と八源氏ハ京御のうちなりけれ此中将ハ後まり

人けまし少きし源しく此君ハあかひさきこまんハは惜ま
と源のおかしく志まりり今昔伊ましひのまて
　　　　　　　　　　　　　　　　見しより源氏初し
おほろかたり　　　　　　　　　　　　　　　　　　
し　かやうんに　　　箋曰源の人をもとかえよまりとろまるはつまりとたし
人のんのとやかなるまり　　　箋曰人のんかんしつくて女の方
よりかへてく人おほきしされハんすいは東宮うしあるすのかし
人のてハ女のいとしとよおほときさかをくて男ゆやまうあるる
すれなりしし見ハ大らとれてとりとのまて
　私云此義不審只源の家ち多めに京ちのゐまうかてゝへ
されつゝりハあやまち　　　箋曰源の答ありしてゝ伊なら
とと云あめへまうらへ一句かり
人れまちかく　　　箋曰人世間しされわかしらん死とてあう小寺て
親すのほくそうさうく陶ろさちなれ人たんやよきてよお
此説中よ親すのとうわきたくりてや後くまへかいう
うす候なうんし
いさやなちやうかれうしき　　　　此令源の別し身呼まれつかくあり

此音つれ〳〵はいつくとし
其日今朝早下の紀し源のとありましてこゝは法輪寺の後ゆへ
用捨の様を見ゆるる
秋云夜の紅葉其めす　其　其む西向し
おしきこと此とハ　風流におもしろき斗れつまふはいつくとも成し
肉室庵らう　催る承の妹門　いつかしせうかし趣きをそれ
くゆてやわりゆるそ知らされしるてふうすれてこゝあるまある
やらかさや心やうらして御うらん志て心得さ
くさかしもあるかるう　涙れたこのこれうこいうもあらしとし
らうし志うかうかいつる　必 源の人しさしうらうてあ給し
必 令聊約すてさそへらうししきことは後人令ちとくねまて
いとあめかしく
其日巨宗しるやうなりん心て　其むかし出き札あしきんここし
思ひ少やとまに　は 花田宗巻　後日明し置積の並し其秋下日
人なしぬ遊ひ
む 花つかれるさし花つかりまおひのしろ浮花田宗巻まか九行

其しり参恵し便け巻みくゝ明なるに
すれきあることれ音て　必 夕白上の一周忌になるし　其月
む みそしめよろうて夕くれのつらいつる御云し
よ 川ふひやまいう　秋 せすれぬ人れ、よめつわかのねんて
いるまうやうそ　秋 源しんてうやうまつまさ元いうるかあらとし
いとおしと　其日これは無真し其なる
いわしとふうて　其令聊の人　秋月
か おつて見ん　未稿てさ御降らつて
こ降えさいつく降ちめて　む 人の世すなきあきまて　秋季 三十日
くまし此し行りね　秋 源約しまうきうましし
すまる 令聊のいつや此きつくされしそその去て
うやうしきこと　其阿そちかりやうしきんし
伝ゆてもとひ志けもう仍人なんとそふまこて　其こ四句
其日月をとんま御しもね時ふまはあし仏としなわやいなさとる
きつきらうてはやうやこは気くさ気くなこはいつとし
世うきうきらあうしてとハ人つくまは何てま事も見と見は

出生一年例てかゝれたるやうしみの言ゝ人はらひいまハ久しくて忘
なしくおもく凡ちくへ中くりてゆかしう思ひなりれハも　此末摘ハやう
うつられハ普通のおもむき誠にさしらを聞て也　○卩さ我交
とやや花宴の口やつ也とハ口かくて云但しとよろつきこちとハなれく
しきんしき　以上義のふ源氏
おもひまつらくてある　御参むてハ何らまりきこゆし
哀世にあらん人の　心命婦らん　義日
たくしなりやうまてきくてあつね　○命婦源氏の御許へ参りて
一友まゝ争ふつ御忘れ給てもれ也のおりしまほし
私ゝ末ゝの夜々の御語らひかゝかはなの月ゝなあまかひ負
ようの事よ月らてる通をうちしろいくちまし　きつきても
心の内ゝ御らむせの心くき給へつゝし
よひる　心宵居し
よりあさまてあちゝめと　末摘ハ橘おなしおゝれめとハ
命婦ゝ心の内のなりしわれらいみとのうし
ちとみこれおりしもちゝ

よふめる返しきれけり　源のうつし
御か女たち　末摘ハさらつゝ奴や房也
忍ひまつりくく　心苦しとも更ゝよしくし
ましきゆゑていふうちゝもいまだ御如ゆくと為寺て菓子范丸　私云ちとみこの御心
御けるつかすゝハ　義日命婦の気色悟此一云不みゆるか
ちく哀ゆるも　義之の事大臣かて彼令をきんひゝそ
のゝ辛未のたうし　如日
八月廿よ日よひ過るまつ待るゝ月
心もとなきにうれハくもりし山のまつまゝてゝ月のおもしろきにハいゝま　義此月言此源氏
ほしのひかりかり　或抄此注ニ月星南苑とを詩をひ
いとよ風おりゐる　命婦ちんて
心のひくおつしらの　源の末摘の事へおいしきうし
いまのみよる　義日琴の声ゝ今ゝ古語なりまへし
みられそもらん　義気婦らんて
んやもとく入給　義源し
いましてあいらつま御月　義源の此ハ御卩合也その後にまうし

きらくらておかりしもし　家卿か詞源のおかりしきゝす評云
いたましきまし　辞退きらんとしてせそしらみまかりてんとし
きいやまうき　ほこりむあり男し
ほ身をくくとしふ詞よいふ字弾らくてらいつし定家卿説　秋月
いとろしとそひく　必ぬらしまて源へ出西あれと家輔卿
これよて末摘の人よたろしくそふまりて
人まねきこえんやうも　思ふり命婦かさ見し詞し
うらもしひく　必服思の詞し
いよ人まいちくく身くれけしおふく　義通着てありて供きけ
とあるハともらくもとし　秋日
すのこおそハ　如命婦か詞し禁中まハ此物語するの居所てし
わくらしの乱かてみえてし
て隠らいとつらしさてて　或於末摘の事つらしきすましとて
ことさ家卿てさしつとこめす
此三ら様うら御き　常日は菌ハ末摘之料し
いとつましきま　思ハ末摘のさ見し

あるやうしくそかりて　末摘の人になれまりぬ人もすかひかくし
わりなき人ニも人あるハ　末摘れ人くもし
けそらてまつりん　末摘れ衣裳と人てのおろくしるし
わりなき人とハどのまてなる色をさゝしらす末摘ハ何のんを
おかしらくおかしまほとし
おとこいつしつれきぬかさ男代　思さとれていろくもおっれ風俗さ通
見ちりん人よくて　常日冬るとも吉例ものんて
そちおかしうふもの　家卿か人をかくれた出りるさハ
人やまそしとし
まらつのよせあれしてまつる
源よつねよせあれ有まりて速忠のあまりこれ統そハもう　常日命婦か無下おもら紙のす練し
ひきゆさら太臓源のさかんてとそろし郎よ末摘のあるれ
やつそらんとし此中末摘へ対して以外の命婦か無下存の事し
君ハ人の方かて　必君ハ深しきひっこえの此きちなれハ人あくこと
されくけら局　左礼覆　義曰
風俗好色のことてくうの国中のかろくしきうたのされ

よしばむと　はうしあいしらひたることはなくてかうおもひたまへて事々しう言ひなしたるも

えびのか　衣ヱ被ヒ香カ　文意被香　裛ツヽム衣ツヽムし

香字抄云　排　拂　檀樹ノ葉ハ及春蕾ヲ為ス香ト故ニ東　房切白　云熏ス皮

文　裛ツヽム香　俗云　衣比郁王ノ家ノ方裛香アリ是ヲえひの香と云

一云　薫衣香の一名なり　一云　さまざまの薫物の名也　以上箋

箋　此えひの香ハ薫衣香也　ふるめかしき人のしわさとたきしめたるを云

ましてちかきほどにはいふべくも　必　ちかきほとはおほえし

文のたよりさへおぼつかなくてたゆたはず　いかにしてもあはれなるさま

いかなるにか人のうちとけぬは心ばへのあるにやとおもひてやむへきならぬ

箋　さてはまことのさかしき人の濁りぬる心ありて思ひ出でらるれ　とかくやすらひ

ぞんしたる頃のけしき　末摘花巻　一切の遁き人に近きことなるをも

箋曰　梭遑仲兵衛とて　不審　河海日本紀　梭遑不知といふを

是兵衛の事なりといへり　何　同廿六年仁五年　皇后其兄救与天

皇殺サシト時ノ法ニも退字ニアリ　脩ア御シ喉テ咽ニ進退ニテ而血サイ泣日夜懐

悒トツリテ無所許言とい抄にも退の字の心さだかにしられ侍るなり

も退は源氏のまけくるしき心ありしてしとかくや云の心をいふ

源氏おのかのなさけをふかしくなしけるとし

弄　さても身の給ひしかにもこれあり　或云　或云玉篇至心至の字心と

或云　自志任　或云　止給　以上箋　私云　河海箋　源氏抄　秘説アリ

必　さて雨は兵衛の兵衛にこそいはれけり　兵部卿　有何しるて

いひてといはせたり　なりつとしてたたみかくる　耕雲本に　出返

と教へさせう

箋曰　花の色にそへてなり　かへりていかにもみれはしらぬ

よろしきを物にたとへたる退かしさよとよむへし

まさ家またしておくのまたのかへすにこそ　故の時まして物をいひ

のさまひのさにてふかう　末摘花つくりて世にも名を立てたり

おもしろく古にもあるおもへての給ひしと源の

これからになる人々を末摘花と言ひしもあなる

あたりをくるしと　河　禪ススキ　あらさここの人　をまかる

は　君たちはとわかりてやはしたうそあらむ　世中に　王女など

必　ここにはなしうるまに消えて　箋曰

仰ぐとて　箋　末摘花の乳母子也

ゆるしなかりしと　めつらしき末摘の上なるをとらへて
此末摘よりうしろ御心のむし
らのつきてさりめん事ハさこそおかしくハ(?)つかはおやかく
私　これハよそ人の説に世に御行せんと御出して世をいとひ
かゝるつくといひく何となくうちおもして後れいとね御心もなし
此物語にハうら見て世俗の御心もおかしく見ゆるし　箋曰
みむしゆるゝのつとりつるよろしくかくのつきてとらへんとす
とハあたりとらむはハ御心もらて御心のね行ひて猶つまそのおいてよ
ハ八雑の御情の時説君のそてとりて風俗御説をするらん
此後ハ論義とやもなしそのんゝまて世をほし
箋曰　何も人をかたしと云ゝそ割をなきまてハなきれともさうて
こゝの色をうをなきてなし　私曰
人情をよハおつゝねやうよ
箋曰　末摘のうへ歌文のやうにハいひくたし
猶よりハあまりつく　弄　其の方そまりいと源のえんて
箋曰　御傍をきし　ふ條しうハあいらしき猶すれもて今の歌
まりかれろハあつらしき猶待るれハ源の後悲ゑをうし
箋　此抄の義ハ御後に似せとか歌文を末摘をとや少似て今ちとうろ

くちやつきうちしとこのみのふしとも附のつらしきみて　ハ此方一切無
云かくうつりしよ好て歌文を少して悦しきあまりて申しく候す
申されゆゑし　私ノ義　あはのうちよのもんれ上箋
みほ
いつねとてもいうつゝ傳さうとたうあつらへとしこあふれいらうし如何ある
を六帖
ゆよいハ下如のあれまれくていしてとゑていふりまさされる
箋云　ゆらす方林の旧
私
なんハあやかし
箋　千云万呼不如一點之義也これあるを今よおかし
此時琵琶引別有幽愁暗恨生此時無声勝有声　是は又源氏
ひとりのやうりよとなるらん
なりやかや宅て　箋　此羽上ふともあり
いとうかもさゐかへく　箋　めつらしき猶秘とし
とかくとは　箋　りしな人よなるいきそて源よいふくとく
こゝろをそむ般かみて　私曰
さあめさまへぬて　御師まてるへしいしくぬきさらうて
ワ方よ　箋曰　新方いつかのなりし上れ羽よ源氏うらけ
しるよやてかさる中あつ此ありまて扇の義見てしらる

さるゆへに　赤橋の西にて所作之し
今ハふつて　参源なり
くらうめられて　参議　致仕しより待し
さりはなれしと　源氏のこと今ハまうさしくへし
懐之はなし　ひくき　四源の観念しめて　参日
うからなるぬ人の時節　参源氏院ころへなれハ一旦のや
うるしまて　やそしちて　そうへきまいらくしく
吉田日記　せる人々へ今こうもしてうゆきのまさ　る銘すき
まても今よりすれハ未まてもこれ格(?)をしきてし是源の作し
こまうきはあさいう成　故中将の源氏胡蝶にてあまらし
んやをきひらう衣の衣　四源氏初し　独のまれハんまうゆる
せうら衣うしさうて　時しのもて　せうれハ　後のうらし
内にりけて　内裏よりつれ退出かして　ゆすゆし
せろまうく仰らまうけり　内より退出しさせたまふ
参りようし　故中将の御覧し
朱雀院の行幸　参いけみて　同内裏の並し　弄月　秋日　参月
おしみて　故中将の父尤たたし
れらるこハいひ　四　周書日蕢帝始置轂為粥
ひきうけされと　参議との車まて源の車保を用さきせ候と
故中将のひろう車ふのうかし　弄　菱生ままて　故中将の御諸に特す
好いて衣ろうさもうらし　兼日
さりとうる此時のうし　らう又源て同車し　ゆうのや
さ通うく仰らまうけるうて
たる人へも出かしうへさしや
武将まかけうてもま　大臣へてあかしゆえをかうしとう七さ
かくらみは　如　赤橋の清らくて
なみへいそく　四　まへ日笠印られ初めうそ初をひらう
私あハせんてハ打うしらし後朝のみ仰えよしけんのし原めし
かさねらせんと　参ゆまうて参りあす衣倫の笠印うりと
いりし小ゆうりあり
けんのうらみなくうしうり
まさのけめのうれめうをそうして中しこうすまけハさうう　赤橋の印

箋曰後朝の文のをそくきこゆるも世なれぬ人はよろこひきぬかすと云し
文の箋ハ有し めくく人をあひ給ふへきちかひある家の文
をそきなともはたおほきあそし箋 いつまても絶へし
法 夕霧はちかくきこしきこえまさらねよいふせさもつまよひの面影
ぞ 夕霧のたちきこしきハ世にけるまたかけし
如 人あつかし
箋曰上る八末摘のさたれつるそを云う給ふ人よ面のさいつゝき人おつ
としいふせきハ事毎し おもはつくすれんかし
雪こ給こんかて 面のあされおかしげんとなれ絹のくへし給はし
箋 人はあきらかなれとりなるへし
おりしもひまもしき 箋曰文の使おりしまひまつとくて押出
おもひみされたる 末摘の人あれさしきなかなれハはの
おもむきてうるはしくさうこそれなるへし
ふたてまたふるさとふらてたまはりて
物思ふれいの 正末摘はうちて何とかはりて
たれぬしの月もけり 里はなれしやまとあらし 何よりすゝめせんほとも
如 人めなし 箋曰 暁のまゝにも月まつ宿ハことろつかうなる

いにしへやまた出るまてんへいいふむとしまつはめひ晴ぬよの
月はなけれともあはれまつめらいなくさもしへきとしせすて晴ぬ
夜の月まつ八ハ世めして おりても法 伏せしもし
世のまつするめては家けりせしよう
むかしの一ふみて
文のかいうらう紙也 箋曰古常 文の世さまの時代の紙也 如日
式部卿いとうれしとハ一度の面かれし はの紙のあられ名物あるは文の
くらきなしし 私云ほかにいひくれたるハ文あひのおもしろし
光経周すとは箋めす一度の面てあまし
よハさひのよりはよく 箋曰凡ことハほりしてもしやき
あらてかこしゐんや女文の末ひとつあれハそのしんうえん
あはきのとちふく ぞ中さてハ中はの事絶し
は 古定のうちともあり中 央さくきしよそひあらはせし
弄 中古のやうまでもうつし 如ね末の春りよ ゝそのつれいそう
を代よりあつかるよりやうなよしや 如日 箋曰
今古かくのつきての古ちとありて そし つきつきかんなるへし

かゝるをもひさしく　必ちぎりてこそかくさるらし　七日
箋曰凡女ならびにして云く懐旧経冊曽くれとしいかんや
姿ものなをもちつさそうにさんはうるしかうへし
みえかひ侍り　源の君は末摘の君の方にまつらふみさまて
いふそかんとそひやさてやさしくそれ　こしひらやかなる
そかんとそひゆうまのさかすらんのかしれんとうきし
かく侍事とも申つと　是又源の性よつきむかしめて
おくうらもときすのえきえんしほんくらしくらうすとて
そとしかし一形と後悔し
おかしかなくしのまえて　源の御事
如　さてハおかしかれとしらねいとえあくなり　此頬代つきていま
源ハかりそてまことしきかけいとしら様ハなけきまつ
まちてならいれて　必　末摘の君へおかしくあかしとお
いれて大后へおのふなりへし　弄曰
好色此箋め　末摘人の方へさしむかへるや
箋曰此事より大后退おいれ時さなくひやさるしきて源のお

ものはで大后へおくられ給しんかくれ給し
おしうらおゆきうつて　大后までのさ給し
それなのかうらく　親王のおつるへくとものへさてとゐし
いとらし　おいてかられ
おかひちうれきて八の御し　箋河云律書図云大畢篥小とて
文物紀原云説文曰羌人所吹其声悲切本名悲篥及八用書
為此黒無之　河云詠二尺八ノ長一尺八寸舌四寸八分と云
聖僧曰云宗前為羅漢也好テ吹二尺八ニ故横吹之ニ以上箋
弄　この世よりも大なるひちりきハ前なりしし人八の御えても
しれ一人八する竹ときこえあるてある男ハし一畳
たいこならん方ぞらんのりうた　玉名の勤例奥あり
箋去孔記曰鐘鼓在庭　琴瑟在堂　延喜四年三月廿四日
覧三年東ノ九大夫　時平公　作令レ推大鼓階前ニ自打之云々　今案大鼓ニ
必堂下にて打つと　但寛治五年五月廿五日殿上競馬六番
の時　堀川院主上　自打ニ大鼓ヲ　絡此時置ニ堂上也　以上箋ゐ注之
おハしまし　只おハしまかす

れいの母なりにやうまて　抄 此比陳の御陳てなれよしし
せちにおかれけれ　然切におかれし
ぬる母りれ　抄 陳切なりあくしてみさとぬもとしやうまて古の
ひめつき陳てのとめりてハのとのゆかりやうみとりかれ
うれまうり　花 末摘の色なり
きのもとしいはくへく　末摘とこの人これんし
古うくなく　承のなりし
試手也
私 紅葉の如くれ巻にいる代手代御前にてせさせなるてわうさ陳の
いまおはすてし　末摘の今母は末摘のいまさはます四のあり
わうさ母きこくそ　今母の末摘わいうう八尋中し
なれぬなり　抄 陳仔今母ハうしはし
人まくてもとなかしそ　紫式陳の人し
気細しん人やくき相かくやまんとあるしまみ陳あれうあく
見うけあてあさましかりうりをしなし
くうりくけりんりうく　は 唐久し　式部人てなくてよみさう
てこの人となしへしと御従末摘のわりなさ申へうらしのの

んじこの人ハ気細し　末摘の後代陳のおかしやなし
ぬハいさく　抄 陳の細し
いとまなれ程やや　抄 おもふ末摘のつれなさもしとそうさんかへ
おもひ古うへなやなり
箋曰懲字し作自ヵ 式秋是伐前舒是懲 コラスナル陳ヲセミコロスト云
見ハ末摘陳陳の人ハつみて八のかうくさう覚してのかう細し
まれかうき表事陳
人まうくらん陳れいまうひや　気細し
箋曰叢のあへし
れいまやとりふんて　御おもひやういかんて　玉鬘来夜よ
うれしかへそてよきそひととれ此部の例とはまりめす
おりいやりすくなり　うやれんまさのしおうねあへハ二条院へ
箋本細見し　小おひさあつうへまうしなとやうまほそかしほりんも中年
人分とうへ何れ久のまうなかへ今れハてるうと又とうに近とも気細んし
このれいときの方て　気象紛の方ますし
むらさきのゆかり　抄 此母のひめ君の二条院へうつろひおはするハ

ものきよらかにて霜月のほとし　御覧し
六條院よりかゝりて　末摘し
あれはかやうにて　人ハ無にけり　源の性分わろしかん
おもしろくよそひ
まさりやすらんいまゝんと限りし
けしきみえしかなしさんも　かたち白き(?)ゆへあらん
うちとけさるよひの程　源の君のひいり給へる(?)
それともほのかハ
さりやうなとを　末摘の御ふるまひなき(?)めし
さりやうなとも　とりやりよろしくてられけれ(?)
本丁ハさらになきにあらん(?)へきやうなるあやしんかつく　末摘の
みられぬ所に末摘はさらに源の御心(?)しのふ
ようもみえ侍りぬをとし
秘色やうの　御台し　秘色磁器(?)也越器也其色
翠青絶世也凡庶不得用之故云　秘色一今の青磁の茶碗類
陸亀蒙集有越器詩九秋風露越窯開集得千峯翠色来好向
中霄盛沆瀣共嵇中散闘遺杯

李部王記天暦五六九御膳沈香折敷四枚瓶用秘色とあり
秘色のものしきとも
人葉秘色ハまことの茶碗の類をいひて以上のことく源を
人わろきに　義曰かくハ源の物にもなく古物見ぐるしきをいふ
何わろきなり
なにのくさはひもなく　義曰哀宥風流の称し　兼食(?)
あはれけなる(?)まかてゝ人々食ふ　義におもてなし
義河云毛詩曽羔羊篇に退食自公　注退食謂減膳(?)食
をまかてゝなとし云
義曰まかてゝ人々くふと云処に毛詩の語をひかれたり　何のくさはひも
まことハ膳の兼食を云給らせ　御抄に道具にあらて(?)
侍ならはあやまりし
しびらひきゆひつけたる　褶　夕白ハ集小　玉篇褶従褶切衣裳有
表裏而無絮也又似立切袴褶也　白舎袴也袴褶騎服也　末いらほ
字侍るの影とし
くしおしたれて　古称し義河云陪膳に依女房ならさき

ゆするあ侍し給ひてまゐりたまふめりくたかし給し
なしきこえたり　箋大唐ニ教坊をあり
旧 内教坊ハ大宮にありとれ大内の中にし内宴ハ官女の倍舞をこく
私云女房の舞姫かりは本し琵琶作モ名ハ属ニ教坊并イ一部トアリ
内侍所　箋曰今ハ神殿より出てしハ内侍所の御所也
女方ありとまうて　常作らへし
ありえんやと　箋中宮ちやはありかしなりきやれ
何れさもさしきこえける　箋友女の日
古家のたのしきよし、世代　常隣家也
箋曰大唐の王子王孫ハ諸侯王ニ代々重リテ伝フル故国家貴也
分之由群書殘之等ニ指之通塞ニ見タリ大唐ハ四百州ヲ持如此況平
日本纔ニ六十餘州依無餘慶四世元位ニ定之削之仍故家書ニ
零落己法ニ名ハ此道理物語之上可加分別也當時之諸家零落
之眠以不可見之
といひけめへく　旧万葉貧窮問答長歌此証云
世中をうしとやさしとおもへともとひたちかねつ鳥にしあらねは

寿 貧窮問答の歌よりあり　教日
箋 此ほか万葉わくらはり
象いろおもしろ　箋曰伊勢の国さなりてさし　人 箋曰
伊勢は　必 勝ね夜の月まつ里との
秋院より　寿 催しもありし　秋 箋曰
いるのしうり　西 夷イナカヒナ又夷ヒナ国 日本紀 夷ヒナ郡
夷放國（ハナリクニ）夷曲　日本紀 以上箋
いとうまふかりつる　うきへつりとんしへし
箋曰上の詞にありけれはさしきこえられへる刻書と云り
ねをくむろきるてこうまへあつとのゐた
よのかれにおそいりし　箋旧あ隠にてのありけりもあらかし　教日
ほうのせんう　箋曰此歌て服ありてく寝屋ハ下せときにハおさ
まてとも河原院のいうりきてくまひりあまいふちハ此又つまやうすし
人言のきこし　箋曰昆しもうる女房風すなかへ投られしも河原院
のへと見ね所にとふまるハさんうるに人言まかし
いさう紀　教 移りきし限りれし箋同夜さしさかりし

寝覚ときこゆるとけても待まほし
あらしもめくれまて　須の四まあいたらん夜ハ庭とゞ色
うとみへし入しか　雨日もあゆんし
いとむまれ　箋曰たえくしゝゆゑし
かつしてゆめ　必　んてと思ねさ雨し
　箋　風吹あまてある夜の庭をへまて吹ゝとおすへあつかはき
とかくいうるてえへし
かはしるつり　須の御日つゝし
　箋曰上下いしるの格子ハ内へあつさるはつゝし
ゆうしてく　うつすそしかそしつかやうし
うこきあし　須の末摘をとうへしかし
いそきうるか　必　須の寝日し
ふところへて　若きもしもの匠をとうれ待し
さうへてといつくゝ奥まて入るかゆし
さやうてさせめへ　必　若菜の末摘へ上下し
みねやうまそ　必　須の末摘とみんめやうかゝそし

うちとけまつられ　必　須のちとゝまとれうとをそてし
あまうらなまり　箋曰末子を御し或抄いうまみうらとけまとうとい
より見まて末子の心は狩箋の見を見へし
さかつけの　和　見しうら末摘のかつさを手紙なうしくみ掌まかせり
　箋曰はま末摘のうくら定くはあつすら念文と見せらへし動へし
とせまる　さうのしとりたる相ゆへし
さるてうに　おの額よりゆきくゑれてくしききまいゆしう
んかつてあつさてはまとるかくうしめつかなるへし
所々も見せつのてはゝ　箋　象し
　箋曰諸佛菩薩各乗物有之孔雀金翅鳥馬師子象等皆内院之表相アルヘシ象ヲ梵ニハ伽耶ト云那伽ト云異物志ニ云象之為獣の形体特説身倍数牛目不踰豕鼻為口攫登頸若尾列良象穀聴言則跪　帝釈象王名壇羅那身有九由旬高由旬
　洒　観音賢往云普賢菩薩乗大白象鼻如紅蓮花色
象ハ音をうつしう
　洒　小まとしきかかめく月きハせるしまかし見曲るし
さゆうまかうく　見ハ末摘のかの文し

弐本ニハあくとまいらせてとあり

ましろき絹をきていろくてとし　箋曰白衣きぬをもちいきぬはらそには

いろはつきにわろくなつかしてらかあらひやうたる

箋曰絹の大きなるは下かさねにめかはよしくも北白てなり

ちいさき絹なるハ一そくしもあくもさはゆきもきたらいしよ

あつき腰につけてさらう　私云腰する比箋見るうし腰よとハ

つまりしよりていちらつ絲し

さしばひく　箋曰阿鋭茯子　やまとつまりしらし

いかりなるまへて　わまらやせらはハ骨さるまていとさまかりし

うやられは　深のうちや高し

みのうちを　箋曰懸揚也うつ揚りし

実もうちいしも鬚のうちはしと懸揚のきれ見えしかし

ちうなのうきんし

らうきのすずふ　箋　褌　大小あり　男女通用

或説云女は丈人にきとし

きれうまちもとせん　見よりあかき色のおまかうちのうきんし

いかし飛きぬて物くとさくていへり　必

恋しし女のきうおかうりしらに　恋の説なへし

箋 色云延喜十七年○条銭三善清行請禁深紅衣服奢侈日但浅

紅桂黄朱及丈色者不在制限

長保元年太政官符云紅紫服提防自存中袴直袍下襲之類

或是用紅或亦用紫誡雖禁深深未曾制甚浅色

今案紅紫はうち文は禁色にかけりあさきんを禁じ色を云

制禁ずまかよそれ符て云々おるべし

あすよ人のうちもちハ禁色なるくしもやもく見ゆるもきれそれて用

ゐあまうつれ色状ゆるしをめて云説あり度あやまりし

聴色の延喜式云紅黄色也紅紫不以為藝服論語云り紀ハ

けうきなど云り

箋曰東抄の今案吉ハ統へし　今案此ちし女ハ紅葉高き神し

て紫優かし論語のみそ又あ書あり見ハ事さるを色なり

薄きハ桂うしいへし

うかしく紀みへる　箋　色云おの色見ちうもきれなく云々

歌曰夜のくるゝもしらしかりつるといふ詞まて見えしより一首也
古歌にはうら見え一首にてあつま河内なとくれてしまへれ
なくら南うくろきまうらん
歌曰此詞まて夜のうちはたてもうらこ玄ハ虎まれ衣のあけさうし　毛日
衆秋　此歌の文のくろきをうらし
歌曰夜着とハおの事　掛一首とある　衣の掛しみえらら深もうは衣を
小掛と見るく味を大掛とうら人まれむきぬの口牙小きぬの上よ
うハきその上まうらきしすなハ口牙まとめ加きし
歌曰緒からハ東橋のうかれハふうきの衣き此ゆゑ衣のうらみをきよ
まつくもんかへきれ
うハ東まハ帰りれのハきみ　安川拾遺六帝文季すかれハまゐり
ゝるえ小ゆる入名様川ますとゆゑかかつらしたる
衣かれと山ハさししといふすれハ衣のうちにぬけられやをかせん
山風て帰をきゝとろつゝきと衣うき思ひまハ渡る神ハぬ道行
歌曰拾遺集とめ了
六帖ご志かへよるをゆふやは衣を脱くくのうちれ山かりたせん
銘衣　和名云フルキテンノトエ云　欺しぬくれ嵐に

西家云　源時希衆人帰後着黒銘衣と　花ニ江次第云　着黄蓍容
参入之時重明親王乗鴨毛車着黒銘衣　八重見物此間蓄容
後以件裘一領持来為重物見　八重大怖と　杜千家二十二　奉送魏
六丈佑廿府之吏廬陵日李子黒銘發得無妻嫂　注　摸孝子子
用黒銘裘葬又書遊數歳大周西帰兄弟嫂妻皆卻笑之
又云　見無[illegible]鬢髮燼亦懸銘裘[illegible]婦娥寡天寒索九月詩
以上一義　青も盡すわりハ遍返よ
弄　うらみてハまうすれよろこの事よ
おこひのゆへつきてくる　向古代　由仔上云ハ荒立しまの衣裳
かくてつやされくる　それをいてくるしまろ手こちよかくらきまて
のまろきゆへにましもろまきくしもて
まれきへくちとらてゐ　中の空東橋のあとの衣みまへ合すかれ
いさり深のあきされて掛て出くいかれぬし
礼のすの衣　ま此衣仔うるてしらう
まれさへ帰ていさされ衣うきしき身の何ころさまかゆかられまてゐ
ぎしき衣の衣うハてくる　日　傳二友し

若　政宗し　如年か歌合内侍所紀史なとし威儀とこら
さる儀しきのよくしくしきさ白とまし　発句
まくろいくら　ゆるきしくろいくらうミと
式部卿のくの御かしんそろうねんかれにみつまのせくろかたなと云因人見
いと物しくめくれまて　　必源のんて
あのりしきへなう　　必源の御し末摘花さらなんさ白さ源氏見
そあ給つれハまことけ給てしまらうへきまに懐にしまう曲なりし
かこうけくいうそきおまて云れハ又色ハ小同し
朔日さすあのさうれハさけあくくなうなりうらかれむとお月ゆりん
を　あさひうやきさいくらふさしつるん此れらひの下れまるの
若　源らも葉水と同りし朔日まわうおのの葉水はさ必ま解て
露ハすれしもいまさこころつく氷ハ露さるの末摘花れんの
うけるつ似く文まさまなしといりとけあらし物むもある源
とよめるまみ源うらのさ白てるやの七　秋冬　発句し
色てむしとうりまさくいて　いえまわしまきとえいうねさ白し
しめふしそ　　良同し

よろけくろくへきう　　松家のあれにろさ白ついりわかまろうへうれ
末摘のうくら花のすまも人まことのまろうん
松の雪花あらくかけま　　貞松彰歳寒とようま雪ふて凋まき
源ハ松の性のあらくかうおもし又服あふてことまくりは松は
つまうの雪ハあらくもまうり花ゆるし
を　松の雪ハ白き御衣とも　しらくかけさら物すれハあるくのさなとや
必　あるくうすまかていらハ雪のふうつりうしるうさ白まてし
発日河か歳寒とをまうさう衣か源からしとま衣に錦か似うるしさ
芸ハそ源ふはうるう花ふう　つりのくらうさ白し
今れいまむしそうの月　　を　雨夜の物語まらいり空さ
あうまのしき物あうハ　　発日最つりのすし　字書曰し
秋　気へれてまいさあるまつりてまるのめてかやしは　あハそふかやう
あう小ともしんの御まつかうますそうさけ花のは源のんし
発日花のま二つあり上品のつハやかなるなのさんし花ハ桃色花梅花之
もうか次のしハ形ちかあるまうまうの花ハもく似まきれ
かへうしとそうかやうなるまもとろかまあくれさすれまさまもとすへつき

さらすとも涙にくゝし袖はあれにしとやかみゝくましく
ころのやさしかる
松　此句ハ新君に生見の句しらうす我なる面なるきん
かしき句しき花もかへしとうつゝなかしこのさら紀しるやつゝし
雨の行つし
松　千年此軍ましきふかうき事かくし白ハ萬の義を
月し申しゝうへし
波にへき雨し　むかしきゝて此行はいふさしふかくらん今
まそ東しとおりそやしかり又此へは打にうれいせてす
夜ある此さ母のつゆとくいよりらんし一くうしきゝ色の夜まんさしふから
ぬ人をかまそていふとり事句しと此浦のゝし　浦の浪に打寄し末橋のこゝろのわきを
なおなかしむ人ハまつして
見んありつしのそてハ独見たちくなまつしきしのいし
まつ人つ云ひ花せん和し升
名ある人の　松高浦の浮橋かし渡めく
ころ吹し浮雅の行にゆくとし
名ある人の東のて　笑ぬ浦ちく此くら言ハ白浪に末れ来
山おろしにくらめ
新　むらハ浦らく花あるり此時のさ母見る揺きりきり　春神ハ名に見羽
同
ところハ末山の浪に乞ふなるへし
春神ハ名にあるまの末山ハ浦より浪のこゝろゆかしそたちさ
此哥ハ今集に此文有浦丸こゝ川の見るやまれさ母を又浦の打乞ひ
のこゆくるのきしこゝろゝとにひかれて
萬日ハ雷の高き升く一浦ちく此よるの夜ふかふかくね京に
名あつそ川くてなとこゝろゆ　ここれ出気ふるとなほさられ此てさゝなてに
ゆくらひとて
ひとらえへゆみてし　いこしきハよ浪すみてあしきすみて
かきくれのいたしきそて
がよりしくゝのまる細し
ちしたなりたかれさの女
つらねて　いつ浪の女なるへし
雪ふあひくもらけ　松　まれのさしけて今はあ雪に虹しておき
よらきの雪白し　笑　半なるし我ハなしてちよさそら
萬日ある人ハ二人きねの衣そしけくくり
笑文　雪ふさへあひて白き衣のいよしてもてこふやく
おやすきハ歩は文字ゝりのちふ　むら雨ニ見かれにせんみて空かけ

弄 老て候やうな

きせんさうし

箋曰 鎰ハ門のかきをあつかりたるもの侍あまりけん事

よりてひきたすくる　いかにもかたくなゝる女の身ほし

箋曰 此詞よりて出るハ翁のむすめなりとしるへし

御ともの人　翁と女と二人ありて門をあけかねたるを源の御供の人ハ見かねて

源
ふりにけるかしらの雪をみる人もおとらすぬらす朝の袖かな

河
私の所さしまけぬの袖ならしあらそてうし流して見えたるを

む
あさの袖ハ朝の袖也

箋曰 此老翁の門をあけやらぬ袖のさむしさをうち見給ふ

をあはれとおもふ袖の昔をも出し

以秋を薫す気袖の色のさむきほとの此事のうたひあつかり

わかきものハかたちかくれす

文集第一巻中吟

夜深烟火尽霰雪白紛々幼者形不蔽老者躰無温悲喘与寒

気併入鼻中辛　箋曰 古来此句ハ此翁を見給ひてある女をと

のむしきさまを詠してこれをさうし給ふてさあるを源の御心もうちに

此作者の此上仲の一説中自然ある中吟の全篇おかしうおもふて

此句を新しきのし　おかしなるおもかけなと思ひよりつる

人ちかし 夜深烟火尽句し　うちゑみなりつる事なれハ 箋曰紛々句 幼者形不蔽老者躰無温

翁のいとさむくいてきたるむすめのしけたるや

さうしれぬれ私の袖かれ　悲喘与寒気

はなのいろにいてゝ　箋曰 悲喘与寒気入鼻中辛 此上仲の秦中吟

中吟の句なれハさむくてぬるゝはなのいろと詠じ出して末摘の鼻にいひよせ

とて源の思ひよせたまふ末摘の鼻の色を思ひよせてまつ中吟の句をおもひ出し

ふと思ひ出らるゝハかの人の鼻より思ひ出し況や末摘の鼻ハさらにおもふ

なれハ自然に思ひよる文章の妙也あちはふへし

いまみつけられなん　頭中将にこれをみせたらん時いかなる事をよそへいはんと

私
よ人のつねにいはすへきやうにおもひしたるへし

よのつねなるほとの　私
源の性情を仕し　義し

まめやかなるさまに　む
まことしきさまにつきゆるし上ヱて此詞ハ

ふかきのうちにそね　私
おもしろき詞

そのしなるめる件　私
末摘の件し

箋曰 末摘の君をうしろみせさる人のゆへし

さとりへきいへ　箋 え蝶ハ権中納言の女なれいし
きゝふてらんや　箋 西夜の御清すありしことし
ふる世のあすくつる　さしつハ宮様のうちと姫のまゝかゆかし
ありさおしくる　ぎ 式の宮伝くましへし
こしをもられぬ　箋 源すせ歳の御とし也ハけしき末んを内の
内のれうの為かし　源の内裏ふおいりの所よの曹司相違なるし
秘 源十七八歳の正月也　行ふこれハいまさへ同しきのつまし宗の行よ
此いふらでしろとあるよゐ略すものすめへし
たいふの命婦　末摘へのゆへうれ命婦也
此命婦ハくし　源のくちくしすよ命婦にこれハめすとおし
あやしきるすの　秘 大輔の乳母の娘也　箋同
かわさるのうちそ　源の詞也
いふかひ　秘 命婦か詞也　うやすよしとさすへし
かいこうともまいりそてハ
箋 日命婦か自分の箋なるハいて姫んりへすつくし
こととこめられハ　ゆすき云伴等なありいかの人すへてをつみてさらし

きんおりて　源の命婦は数ゑて作る也
かの家より　秘 末摘より也　源のこゝふく作てを命婦にいゆるをとおもて
まいりてこれハ　こうかな命へきすかてれあるし
しおつゝつ　かやよいの頃へとて源の御ていさる命の所の御ゐを
もよはすのしきまするハ命婦の逢世まさるしとこ式部か所て命婦の人を
おりき此儀すまへし
みちのくにかみの　懐紙と奥州よりすり出しやさ紙すなる
みちのくのまゆみこの紙ともつ懐れ宗伊まぬるとよし　正義
いとうちかきおかせてり　箋日つゝしとえりゆるすし
歌も　箋日数ふきぬし
末摘　手もとの数字もとうしかるすとさのへし
御衣裳かくれのゆへきれハたゆとハく世みかりしゆへゆみ
を　え家集　いつそれ次のつまんう衣装ふられつま限りハ箋日頃く
し葉　棟ハうしてとおつりへあるかとそへさ衣のあまとまとさ
是ハ源氏君へおもとおかしうなすまのて命婦ふ末摘ふれて

みす入てかきまよひしうちあらう
ぬれみ　箋曰　縢（ツヽミ）　綾　泥障　平具延喜式
山路をきたる　箋曰　衣ハ呂　藤障　延喜式
これをいふ　是より衣婦羽ありさま申すよへに今はなし
つくしのかの　箋曰ぬきとえ月ふいふりれ手綱のさまに脈ある處に
ひとつ川に　今様の申すとて入れてよくつきまていふへし
いさらのかれなん　必　須の初し
紐すえかきん人にもなり見ゆる　旅の初し
箋曰古拾　あふ宮はなふいなつるあらかの袖すそれかきん人にあつかふ
かさ申しのくらつきや　む　東橋のうつすし　如箋曰
てつくれてるのかきり　東橋なとこなしなれ須作りなとすもと
あしきわくみしことなるへし
箋曰　ゆふつうなりや　必　ちりや　ハ清院の作をと云し
ちと申し中人にあましとし　箋曰
かすこれかつことハ　東橋の下を精と名けすき見顕ていくましく
まかすは背をかうるうとハこれらぬ干しと解釈しきらんれ

いまやうの
箋　花云　梅のこき色ぬる衣にて本のよふしあはれなし　是より東橋の送り来まれの名所なし
このさけれ楽進ハ今楓との云ふれゆらし名を田紀ら
なの名れさゆしまりとて禁名の細されハ之ゆりたまりとそいふり
世継云　殺子内親王　梅さこ所とらまうつさ内の御使として出雲
む　れ肩今とりくらうらしのやうさ印しゃきうら
にうれまうりまつりしれこうさかうきみの上下やうれこうちまき
ゆらしと　と楓をゆあるし　見延喜式　従ら八のうし名門おれ
あみなるへてハゆるしなしとひなす引すりはハと楓名とひしん
ゆるとまし　くとハ世うし名はしらへてそうし派れともかへ
しらうれハきあのすし
なかくのうしら人初しう
うかりて　あれ本衣ておるれとよく　今集あの本衣の下西見
箋　南膳の本衣とハこしれ上古小い
薄名られそハ本衣よそていあたへつしれいまやう名のえゆるれま
うつやあうらうのきさうとりやまていまゆののすしされハうる
めつうるといふかくるときうてなかしれうちへひくしう

とりハ恋衣のましこまやかなりし縁文のくさまハうらくへゆかん
なり句ゆるのこまやかなる人に見え今葉の趣しらと
（発）
色上ましる今様なきあふと云は恋衣とも 様文のうちにめりて月夕
なりさぬれのこまやかなる人に見え年葉にもきしらし
にてありてうる月夕のうたしこれも四季よりと抄の流にめいる
とて年々と一句ふりしてまぬれかきとみ南　なやしとも刻まれ
恋衣のつまに添しものの説て大略ふれしめと枕度陰陽抄
西は連歌也法体ある関白恋衣布待て梅[illegible]抄恋衣出は歳乃
猶要皆練道　寛弘四 三五法体寺関白左府行曲水宴主
人忌桃花直衣聊文指貴山吹文衣袖永久之十一十四五節童
御覧月法体ある関白西梅淳久萌木ガ猪貴皆不衣以上装衣
和云 秋ハ装ハきぬハいまやうくなる恋衣ハてしくなるのうち
やさしと以て恋し　秋にハ装のきぬハ西見恋衣の例とむもくろ
装も句偏にぬハ以句やうなし恋衣も用し文のうち句やうなる
いふ萬し是れハ西恋衣のつま続きてもてなると云所
うかやうなり　（発）
紗にとうき句法に上ふ云ふいまやう文やきね

なくて云は恋衣とて様のうちおりて月夕なる縁いふまや
なを縁しつう　発月出て移し　平懐の様し
ちとそめよられハ　法のまくらし縁付命婦のまくら
なるつしきみつともなし　小夜ふけては来ても縁神かゆらん
（源）
発同源氏後悔のはしうらやかへし　（秋月）
（付）人々これをみへはくうしくれすむのまつじと見ゆるはやてきん人々
（日可）まそまのこ兄ろやらんなのまつしものうまふあはむ
文これをとらし　かなも　あても法のまくらしひかなり
（付）あの文これをとらしかなも人をわくみなさらへつてふかり　（発秋月）
[illegible]　出会一座のあしき絶ゆみかせてうり
おりくの月かをと　（付）新月の流月なりけし
河にハつまけてわくそてるしし乃新しと云ても空のわへまうれと
今葉に見ハ命婦のかたへし源氏ハ月かけなりて左かまかん
まかふ命婦の月影のとふハうみ寄せよう斗と覚えしへうきまつ
物うしおくからしひ仰てあり又はれのあかりて月夜は是のゆそめ
さんとてもありかやししに付け命婦のまくらあつさん

義曰今宵ハいまたひるも雨にハ入なれとよひ〳〵の月新ニま
けのとうち侍るありけらし陽の雪のまころ義ハ悲花競様し
一本つまらけよ河海ニ似との也但をふハいまあやまりなんとよと
足よりま前句ハ乃し梟の句侍る会もなし
くれなゐのひしをまつともらよしもひさしまりなん名なりてきハ
河太詩　永　日本紀　足　文川　足日　義曰
む前句まつしたる人しくまなし　秋月　義円
義曰説へくの下也云侍よつ格そうてわ伊ても紛らうさ
いハあら名伊ともるれハうもちうならてま伊らなし
なきそてひろうこ僕と　今宵し
よ後ハあるれそ　住のんて
秋ひなのくまよま　そしなてとけゑんし又もへらなる八
来橋の口つきのやあく今宵かくみてあれらしのんし
秋うやうかうハとみ伊さうかうハとしせあて以今宵の口つれ行らくハし
少ま以毎うそなりうし
義曰第らうあくら詞しやて以情まへ後ての可申りうりよの

秋への時ハ正一月よ六月迄の餘情のあまり小町まてをやつゝり
ぬすのしはすと同しく云り　松云義の前をなくサん
つまらそて云はなして云り
人のかつそのえころしまる　前来つし君の情ゆかろうぬなる
名のくちかんハ　義曰人て其れハあやしくとゝへし以哀心の
まいつ下侍人をもたハ来橋の名伊くるとしぬれ泊式まて
名伊くりうしまつのへしくし
人こまりまハ乃ら町くさんや　今宵まれりの詞やハ伊ちし但今
姉まり紅の詞し
町の情うさハ　松陽の詞し
秋以哀の陽のあさまりしくと松月に仁
なりわ侍らんせさせ　秋今宵仁
わ迎さへんのさ　今宵伸さへまま色あく泊月よりまそうし事
ふと後悔とうらんしむら陽の今宵ありく人伸らうあく
こふ侍うてといふりはいく
曲そうわりね　陽のおいもらち内のゆらのい前よら今宵のたつし

久しきから人ハ　禁中の御盤所より気嫁のきみつかひ女房にて
きしのうれ　縁し
くりやみる也　さかつくなけなりけるし
女 さらにいやあかてし　祝日
かんにすくよ内ハよそて　儀 用捨のまてらんし
常陸宮の高兒さしよらし縁の者か浮きへし　幽日
むりよひうちとわり　命の前ありし倍うさいきさ
つまとの結ぶ　秘蔵 秘し
女房うち何のかたもんし　御盤所よりきうつめ女房うちし
手梅の色もれ久めて　女 花より縁の隣にすまひなり　幽日
清 求子の言し春日の祈りけいくハ之黒山とくらの他行よ
とりてハ若 古縁うつてきて　けんハ縁の人中に常陸宮の
とらめとうろ身ひさくさひかうし　鼻れ久あと思ひく　れまて有し
け 儀 秘伝し　秘日
もこハ風俗云とあつ奥入にハ求子のこのしをかす又求子 駿河舞
とそておつまわりひよおり風俗ハ言なもし為へし一説又異文アリ

会縁ハいしおかしり　女 命縁ハんぬてありしとうれし
けしてひとりなといひて　む 縁の太郎より名乗して末摘のるまハ
まつね女房氏わやしくもうし　幽日之
儀日家婦のすし
あつもやさしき家おあるふ　弄 不知あて力わめく翁し
女 表婦のまへにてましし花にハれこふあつもこ一人の女房を付とかす
儀同家婦か独息としられハ時羽日ね中よし傍輩に女房家
婦うきこうし男御とらしうけ三よていう縁あつしきすほ也
とうら婦しとけ次の初おて躰してきうすらし
私云 縁のひとり名とふられハ家婦あもとよろいふしまつねされ
ともいひて此ししてうそもと此男と此躰してきそくすらしきも
き書あさてといつり会婦のまへしてきそくすら翁し
さむしき君翔ゆるいはつこれめり　秘 ひ祢りいしし
弄 あそれよもきさら奥やあうつもんあてされまし　幽日
儀 花ミ衛門府　風俗云云　多々良女乃花の如加以祢利好
年夜嘱案也好年夜　改事要畧

親女は 履中天皇ノ時ヨリ 始ルトモ 何ニクハシ

鼻ハ口い梅の花の色のやうにまかりしと
或日侍従ひあひかれハひくふしきことを思ひてあやしかりしと
是ハおかし鼻やおかしからんと云ふ人ハ無し
(は)檜(カヰ)傳(子ケ)ハ夜面ふくさくりまて中童ありて色白く姿よし
其のお物(ラチモノ)中人あり
ありなまがはの肌
是ハよく知れ女房のこと
或日はこ人鼻赤く人に知りしと
或形をかしき補に康納ら田好人ハ内心より
ひかりの事とい萬かしきんして

(桑)志井ても上れ頭に 左を命婦 肥後の桑女 如月

私云 しいけり弄小紗流をいふ時れかう
此くりそてまつ 源氏のみかどなりけれハ末摘花の人と
よりて そ御あり
(世源)わらね夜をこそ御中の夜のあかりかしまにていとみなし見んとや
(如)新(加杯)君小中将あり ハらてもかしこき夜とまへ庵にてつらん
にしつけてわかき中しめ夜 いかにつ衣つきて人にそえなさん

みつまたのかたハたくみの人そていとよきよしたりかくて活るは
事とらんをみよのしるりなりそて童形にしてそ
かりかりつつきらんし
まそてハ頭 源のあけやまさき白き袴し
此にすりれ日 或日源十七歳のとしの冬れし
うれかしもて 末摘の夜花やかりしあかりて只今きれくれと入てつかはさるし
直ならしくの人のあそてまつれ (む)源の中にあらはな人の世にいまそし
さかりて末摘の人とそくつらのかし
(ヒト)おもう一くまり 源人々の世にかうけてくく具してとらふ意し
まそえひさて いふかりそのきわ此君の人に
えひさめ 蒲團 さる花おき源し 或日
山つき

命婦てさてまつつ 末摘へ命婦のつかへささし
まうしらや見ん花きんと云ひ出し流まて 是ハ命婦のかし
初むひんともいささしもり 末摘の花さき此はとより女房とらな

つきの御ことにつきてとかくまうしてこれを批判しかるへし
あるへしきこと　あるて流の八殺あるよし見ゆるは末橋かつ
なしくわれにしんふれたてはつつかにいかんくるしきるよしさう
とてもかきこそねは流のなしはさうひとつにもくれへしとそ
ひめ来りて　末橋のまうこのかきさてめてたきまうて
はいてらのほとに　異日流十八歩の白月し　秋昇日
てうし男なりしか　を男躰なるは正月十四日にはし神名は奏すへき[illegible]
異日神名奏しくわし天武天皇の御[illegible]ましまして　聖武天皇
の御時よりてはしめてこなたつりつにたらし
私云毎月みなとこなたの月にてしつて定る女躰なるは毎月
白月十六日し
ところくあたひのかしは　御かきくにても男躰なるにはあめまして
御つらあらしの水にてよめるし
さひしき水の　如常拝[illegible]し
なれのみのせらしの　白馬節会し
日　天武天皇十年正月七日天皇小安殿に出御ありて宴会有

平　是七日の節会の始し
白馬ひくさえこはいれさるへし
よろしくおかしきこう　流の末橋へおくらしむへし
けらひうそとしあれ　流の方より末橋の友女にしまてきぬのて
とうり[illegible]の大へいちて拘しき祢し
馬にもとうしてゆやき　日　婀娜（タヲヤナナリ）　並仙居　窈　同上　窕月
まつしのかうさるなら
あまなあくりうへするんは　末橋のへいてゆらりて何かぬまり
なしうかいるなんと流のつまてるまうて是は[illegible]のあったまうらと
又名嚢なるのかうてちとえくとしまうるてやうしは流のそう
むらひさうらいれらへてあく　日本書紀にいてこし枚君うちなうし
目れあしかしてあく　日蝕（ヒトアニ）　東の末きんとあとすへてあてあへし
あるそうしうさるひうりて　星れあつくさう拘さやうしは時の拘し
うれは目れ映しうらかんし
きいて　末橋のまるし
かうしかうし　そうしかをつきりは拘ふうらかつるあとしよ祢し

こゝれはさる経　賛州禅しみのゝもとのつかへしまいらん
なりもしあまみゆり　すこし源の所よ指揮をまもりし　まてもり
おもひのゆり　かゝるおもてしゆりて　いして見ゆるのみと
いそれかゝしゆかりゆるの小　花にいひておもしかゝしゆるゝと
わりて此てらたよりゆんへきるくとゆかしょて
三本かしこいひておもしかゝりしもの付御やすみへし
ゆきもとそて活いりて　如　卜下つきまりる　格子なりけへし
今の東ふ震殿ゆへのてくしたる佐々内のまへおのしおゆてゆり
けりかくやしまいせさく　弄　もきみかしとりけれ共へし卜下つ
きさん汁勝長まよせりもん事ゆより見へきれ但ふ物あれ
一般勘おゝ未橋のうらゆ化んあらひしゆしまとう経て格子
とあけをそれしおいゆそうを見たん中てお承をとうらうえてかゝる
けしきあなれかへし
三ちえ　ひくきていのやうしはゝまするもんくまそたし
かえぐんぐさ

うらめ見さるきやうだいのくらくしげりげのへこ
は　浣庵　唐蓮（カラクルヤ）　播上酪（ヤキハヤガ）　賛かへて具足入とうたへこし
松云三本きあゆうたいのうくらきまへわりとハ浣庵の具ゆう
くしもとらひかくしうけのいハゆきわけさおし賛州ゆ化ある問
たる代入其ゆ浣庵ゆてハ男て具足しきうる
如　みやうの中具足ハ見るの所ゆのなるへし
ゆまとふへうらめきよろきやうたいうくくもうくきたとことてまる象
紙よおらそゝし　三本こハまやうくもいのそわり
源のへし
物しよみ経
女の肢さうくく　未橋の子ゆいりて
くやまるうらし　よのつねめきよらりて
わりもここのゆうれ　如　うるし小源ら其られ文画に風情ゆめ
志でゆさるかう　中の書のへし人なきへと始まそう本をわり
さしたおしょうた　さもおりしよりほといふまてを上へつまりて
こゝろへしつわのへおひハ源の所ゆよりゆくて給まねハうるをまれ
身し所ハ源人對していゝろしくてそへきゆけ出君ハまやかなるを

しゐてもおほせらるゝやうなれとくるし
けうあるわんつきてあるまうけき　も　此段の詞説に有一
小ハ源氏のとうりはへはきめくその中まつり侍うハまてありをき
さいはひ人いく程と一つはうときなうりハ末摘の事よりさして
られうなめりしくさうかなて
花二説あり　いつまてもたうへし
中君はうしきハ末摘の身に当てゝられなるし
私云　此義可然
ちかしうふ契をさうし　是よりハ末摘ニ源氏の君まうの詞　河海不審の事略之
河古　おもわれはうちくかかめしたまひ候てものゝかなしみの契
まさ御ゝわらくひ給の契ともなるされたるの常ハさしまり
さて末摘の契のさくしくうちのけ於見をみえたるし
何事もれしうちくるとおほれ尚うしきのあらたまりんとなし
さくつゝ恨つて如ゆうして　末摘の詞し
河古　百のるさしつゝ恨ハ物てふおらぬまれとて　あらてありゆく
こ前てうかりていうん給のへさ自へ所末摘の詞し早下たてに略之

さうやうのへかたしうらしし　源の文詞也さかやまたうさうのあさみの
とるしとし又百ねるのあれんれそてまたれつうかといやさう
やとしへかゝとの侍うなれ　又源の仏きさいし
夢かと所しふちもうかりて
河奥入　夢とこそおもへられおもかるゝぬゆめハ見まさそうて侍る
新壱究溥夢不夢　伊行云　奥入云　伊行か云人不付て勘之
今案　見れてハ夢とも不思と思ひまきや常なるとありく思ひなんとは
此方の詞といふしや　或説之云人お違めり
私　ふかれ月ようちくきぬ又葉京れ小神ゆくめるれ人ゝ雨白うへし　弄
葉京小此ちその事も此世の根にあるらんきりや
少女葉年のあれんし　或抄此説日之
くらかわひのそらちめ　末摘のさ用し
見んうしれたさや　源のんし
二條院ニ　末摘よりすくれ二条院へし
紫の君　紫ナこしつやおのやうなりきわ
かくおひ　此所ハまさかんのへのこねハおかしきのゆかねて

うつくしき事ありとてかくしてあるへしと云
これらハいかなりしものにて　む　はなの姿のうつくしきをいふ心也と云
ゆ　むれ〔くさ〕めすハいきぬのよし
〔葬〕　はなのうるはしきぬのよし
注云花の〔色〕ハ末摘の鼻の赤きにたとへいふよし　常也ハまことの心ニて　はなの色ハ秋の色なれ
やすらかくしきゆゑへいきぬのよし
しらんのさいてのかたちなり　心　花はうつくし　〔佃〕也
向　紅久ハ〔面〕ハ白くうつくしきハ二三尺藐姑射
切か貴女なんとなるもの
こゝのほし〔東〕の名物なくてあつくしからぬ
む　山海経云東海有黒歯国其俗婦人歯悉黒漆。
今案日本ハ東海の中なれバその俗なるによりて
女ハ左右ハくろきをつけ　古代のとも思はるゝ
花の姿ともナキにあまりそへてくろめてあるへし
或抄ニ此ハ花の名ならハその眼ニ色也とて　けるもの
いきつくろへ　歯くろめさせ給へし

ゆんくるしきあそこそのつくしてと
注云此義ハかくしきハみくるしきなん　む　末摘花よし
見てあつくてよしとし　やすき　此義と思ふ
みこきんのむハんくるしきハ〔姿〕のよしくるしきとも〔称〕んほと
うつくしきいくしあらて　此いひハんくるしきあそこん
てあらでよしとなるの〔案〕也
はつくしき姿の上なりをと見ゆく〔居〕すしてえやうす
〔皆〕ひあつかふことしんハひとしきし　按此義を用へし
まれもうきこゝろ　見ゆ源の末れ又はな上花いうれしとみし
みひとつきてハいふしうハ源の末摘のつらせる給ふうき
給ふ夜いてらすなれてハ給ふうきそし
わかれけ　源のこゝろ　付　源の心也
ありしよハ　紅鼻し
まて思しまなん　よれかふおもへき所のましあるを見へ
〔くきて〕し　源の心也
〔面〕うつくしきまま　源の詞なり

うらそしそわらぬ　墨の詞なり
さりやしみつらん　墨ぬれハまことふかきあはれ侍し
水をれはひとして　涙のしほたれをみやつらんとおもひまゐらす
とてうつしまくらぬいつれ侍りし
うらはいうよ　内裏し女官にたはぶれなどにいでたるにのりし
よるものひ　墨の拭ひまゐりて
面いらうかやうはいろとりそへ侍る　涙の詞し
注 平仲ハ宮の奥文召し女にあひし　あやしミ平仲見けれハ
しそ硯の瓶に水を入れてもちて自身ぬらしてなくよしを
墨を女ミとりて墨硯をすりて入れおきしを志りて進いの
やうよりはつきてくろく成りて家なる女とも見る
歌にそへてさハ墨つきれとも人にもみつへからぬよ
宇治大納言物語ニアリ　大和物語にもみえたる
弄
注 河本ニハ硯の水にかくるとひろくしてあひて平仲の君みな侍る
まそやのしもうらしらへし　私仲の字にかりてしむれ
一巻勘秋河にあり　私云おなしまた見えさるし

わすらんはわすらん　注 わすらんとなんし
本云あやかりとし　私云此義なる只そそてわすらんとらつやかなる
或ハ云ふりかわすらんさハうらうへてもわすらんと云ぬ一し
本云ことはて平仲ハ宮にふいはふに男女の名ちかくならすは道
いつもをみて侍り　注 いつもハつまりしくせうとなと云
伊勢物語伊弉冊尊见女りてあ女のふかきまゐとはいひしを云し
いつしらみすみまゐる　いまさとまれ始めれハくいつて
東橋ならくつかり日田とみてしも志つハ正月八日ぬへし
横しものいへりとなりさは　いまさ来れめてたうかなる　さ田し
梅ハきしきなきなりこと思ひまゐらすよ
注 わかいれてうて思ひ梅のもとにて歌よみておもまりしまれ
ど ほと思むハ若し梅のやうにひききうはなる素男梅と杖よ見へ
みて侍まつくまつり
もしかくしれりとのこうなひ　仁和芹川の行幸の次よ八字徳よ
寺元御遊もとしすりあまりしとせんとあわせしめて階隠(ハシカクシ)に依て
李部王記　天慶六年みえたり　今集南階の男子にて杖て

上達部ハいにしへよりかうしとらの風葉をまじまふかきをて
たのまきよりの兼帯(セウギヨウ) 下帯(ゲキヨウ)あるんなめし
いそく候をもかく　暑早(イトド)開(サン)花(ハナ)よし
原 いろつけたなり　あ梅なれハおのしろくなり
これをみれもそのやうなくうとうと梅のてうえハおつるましと
秘 蒐あり心末摘花すめそうし梅のさおを面白きれて末摘
いそいうとまるるし
うらうめられ候　源のたさ奴し　如 葉子也し
うはんくれ末くいるるきん
かくはうて末摘とのるうれんをとしかて
るハあるいとおしうう院んの行末をあるて見ハ物語の
作者の羽末摘花すし　松台をの気ハ末摘れをといううかんるうはあ
いをわしかはんのときうあう見を見んきを

秘抄奥ノ勘物

むね上勘
元常陸のみこし
文孝天皇承和九年正月任常陸大守
孝続日本後紀第五承和五年正月庚申朔壬申四品忠良
親王為常陸大守従五位下春原朝臣貞吉(サダキヨ)為介(スケトス)

嵯峨天皇
仁明天皇　諱正良
忠良親王　二品式部卿　宮内卿
貞観十八年二十一薨五十八才

夫てまのする　天文八年五月十二日儀定而するそんさく諸人の所者ハ
徒為よ見本紀をりくくを退の字代いまうむ御へきしワうく安
もりきこのを退よまけて法起むしうしおもいはそとうけく所ハ
らハ文それよむさうのそしらこれまてハ歩くいひそてかうけるなりて
さらわてし常所落むて向と毎まれ抜すんかて用ゐハ解すけや

無退の字にんし 滑稽しまはきたくくるにとうおもしろく
うたへいはむへし 人の哥まくに無作法もろくとしさひは
あしくていそくはちの無退のあかはきてまりくとよもうかくくうや
そんくらう志らハ志てまとし 輕々とをましくつきうや先石は對ともの是う
秋云 先石トハ道 連歌し 此抄係名の義し
あう清う中とおもしう そやの詞ハ志手にんれ無くといふ詞あへし

あくはむしき氣あさふ 是ハこうに行く人に此ハ哥多の人りとんお
ありき氣色のさうふてハうれてしき色の哥多ならへのうくいひさうし
さてあくはとハうつくしき歌ハ此哥色ハ花集つのあをとのむもあとされハ
末つ摘の風俗の守此詞なれハまう多ならへをらひかすならへし此
哥なゆし 秋云 弄玉こ口受 あうやしまいそう此義れ

けうあらん つきしらう 花宮の二義作れ只末摘のんしきこきさすと
なき源る對して是ハ皆源よりなうはつぬをとさらくまふ
つきをはこのうかきつうとハ末摘のんてちらあをしこなかなは

ゆきそれはあるとしさしてつのをくれさうらし 此中にハ文章を
花宮の初メ哥宜しれあらもしてこのんたくしいんしくし皆源より
齊せ往哀豪しきもおりうはとハ源氏ハそうようはひもねし
これ初不弁よはこへきをおつようはこれまてそられそうとをを
行うしけうあらん つきそし はりハきを源の古跡してこれ
らう哥方よりまらせそうと 仰そうとそうのまつくし ゆうふれ
ハ源氏のんゆく後へきて
秋云 此哥哥なとめまるもし 又ハ源しよりふてなれめす

まつむ花
右 人まてきまつれりん いそうしあの末つむしをの名あらうそうなん
頂云 紅の花ハ末より咲りてまよつむされハ末摘花と
しるう
秋云 歌ハ 孔はる 萬 勅丸
万葉にもろそのさんつやこはんあの末つむ花の名あらはれもそうも

私云 此万葉の心よりよめる也 よろつのことにてみるへき物なとし
私云 件以上秘の奥子傳する所也 私云 一方ハ此歌ハ秘事也